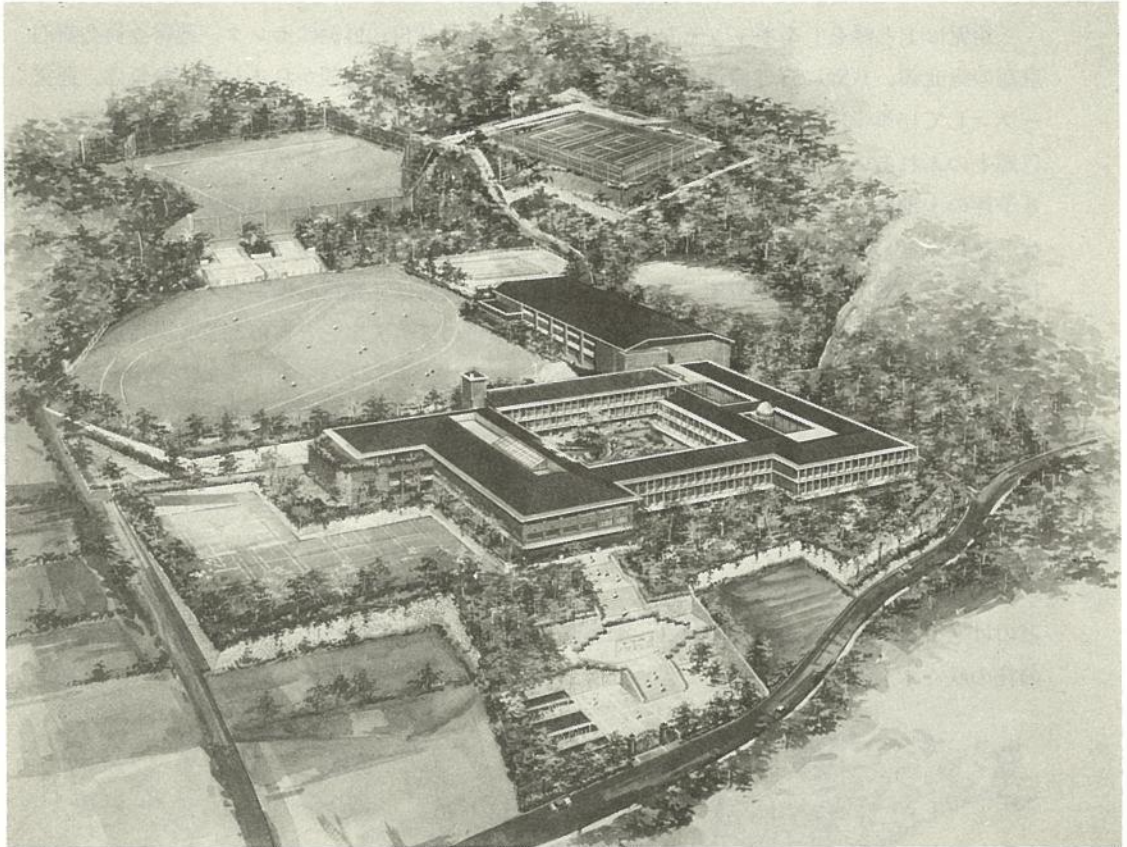


# ARPA・K NEWS LETTER

地域計画・建築研究所



63年の夏の竣工にむけて、立命館高校・中学校の移転新築工事が始まりました。(完成予想パース)

## アルパック ニュースレター もくじ

・幼児に土と緑を 八瀬野外保育センターの16年.....	2
・アルパック連続セミナー。田村明先生講演会から .....	4
・イベントで閉山の街に活気づくり .....	8
・旧刊新刊書評 「山より大きい猪」 .....	10
・まちかど 。ちよっと気になる城下町 .....	12

NO. **23**

## 幼児に土と緑を

八瀬野外保育センターの16年

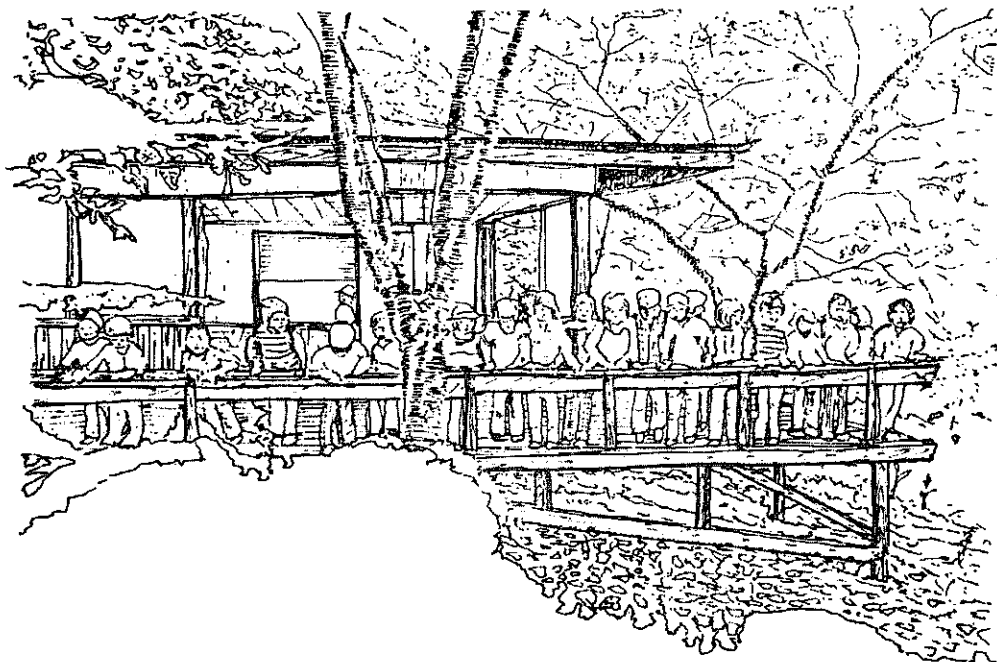
三輪 泰司

「幼児に土と緑を」をキャッチフレーズに、京都の東北郊、八瀬に野外保育センターがオープンして16年半になります。第1期は、「自然とのふれあい」をテーマに、緑あふれる6千坪の土地に、既存の建物を改装した小さな“ひいらぎの家”ができました。昭和45年11月でした。第2期は昭和47年5月に、「創造のよろこび」をテーマに、ホール（からまつの家）、宿泊棟“さくらの家”と工作棟などができました。第3期は昭和56年3月に「人と人のふれあい」をテーマに宿泊研修棟“かつらの家”ができ、京都市の尽力で、土地も7千2百坪近くになりました。ホホジロ・メジロなどの小鳥、リス・野ウサギ・サルなどのけもの達のほか、91種類の草花、84種類の花の咲く木もセンターの仲間です。

4月7日、恒例のセンター運営委員会新旧引き継ぎの会が開かれました。今年は、運営主体である京都市保育園連盟の理事改選で、創立以来センターを導いてこられた、嶋本弘英先生に感謝し、16年の歴史を振り返り、創設の理念を再確認する会になりました。

私たちは、児童心理学者の嶋津先生、植物学者の伊佐先生とともに施設を担当する顧問として、専ら“ハード・ウェア”を受け持ってきました。16年余の間に、私たちはただ幼児施設をつくることだけでなく、地域や建築を計画し、事業を進めてゆく上で、もっと大きな、もっと尊いことを学んできたのです。

地域開発や建築施設は、ハード・ウェアがなくてはなりません。それを使い、動かしてゆくソフト・ウェアが必要です。宿泊



保育のプログラムや保育研修のプログラムなどがなくては運営できません。しかし、それだけではないのです。

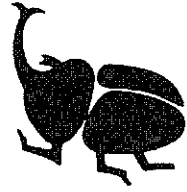
秋、木の葉が色づく頃、八瀬野外保育センターでは、「落葉まつり」が開かれます。私たちに爽やかな緑の光や、涼しい木陰を与え、人びとが生きてゆくために酸素をつくりだしてくれた「はっぱさん」に御苦労さま、有り難うと感謝する日です。

この日には、ホールでバイオリンの第一人者・岩淵龍太郎先生が、室内楽を聴かせて下さるのが恒例になりました。空が茜色に染まる頃、焚火を囲んでパーティーが始まりますが、この日は決して木の葉を燃やしません。

ハード・ウェアとソフト・ウェアと、もうひとつ、“ハート・ウェア”があって、この三つがうまくかみあってグルグルと回りだして、そこに八瀬野外保育センターが子供たちをはじめ、多くの人びとに愛され、親しまれる“秘密”があるのだと思います。

いま、東京をはじめ、そこいら中で、再開発や、リゾート開発など大きなプロジェクトが盛んです。大規模なハード・ウェアの投資が進められ、“コンサルタント”が活躍し、いろいろな運営計画や、イベントなど、ソフ

### 八瀬野外保育センター シンボル・マーク



ト・ウェアも賑やかです。

その基礎に、“ハート・ウェア”がしっかりと根づいていてこそ、人びとの心に感動を呼び起こし、生き活きとした街や地域になるのだと思います。

子供たちに素晴らしい音楽をご奉仕下さる岩淵先生、グランド・ピアノを山まで運んで下さる十字屋のみなさん、空瓶ローソクで暖かい明りを飾って下さる保母さんたちの奉仕の心こそが、その“ハート・ウェア”なのです。

アルパックの所員たちはなぜ、小さな保育園の改装や、野外保育センターに池を作ったり、タンポポを植えたりに、入れ代わりたちかわり熱中するのか、うまく言えませんが、ビッグ・プロジェクトにチャレンジするようになればなるほど、その“奉仕の心”を確かめ、しっかりと身体に憶え込ませたいからであろうと思います。

八瀬野外保育センター16年の歩みの中で、私たちが学んだことです。

(みわひろし 代表取締役社長)



「横浜市の経験をふまえて、企画計画行政における人間的側面について」

田村明先生講演会から

松本 明

アルバックでは創業20周年を記念して、ささやかなながら都市問題についての講演と議論の機会を持ちたいと考え連続セミナーを企画しました。去る2月26日には第1回を、4月8日には第2回を開くことができ、今後も回を重ねていきたいと考えています。

第1回セミナーでは、都市計画の実践で有名な元横浜市計画調整局長、現在法政大学法学部教授の田村明先生をお招きし、表記のテーマでご講演いただきました。ここでは、講演後のディスカッションで出された話題を要約して御紹介したいと思います。

#### 「プロジェクト主義」について

目に見えるプロジェクトで町をリードしていく事と同時に、都市居住の文化や市民生活とプロジェクトを結んでいく仕掛けについて考えています。しかし、なかなか目に見えた物になりにくいのですが。

#### 「プロジェクト主義」のこと

一般論として、私のいうプロジェクト主義というのは、物が見えることをやることによって、市役所の中身や体質自体を変えてしまおうというものです。「プロジェクト」という一つの仕掛けをすることによって、従来の縦割り体質では駄目だということ、役所優先では駄目だということ、「民活」というわけではありませんが市民と一緒に関わる必要があるというふうにもっていくわけです。予算をもらって沢山の金を使って事業をやるのは誰にでもできることで、智恵を使ってやる方が大変なんだ、という意味です。

ただ一生懸命なだけではなく、役所の体質を変えるとか、なにか新しい問題に積極的に取り組みながら能力をつけていかなければ、

組織形成された市民との関係は難しいと思います。

#### トップをどう動かすか

高速道路高架計画を地下に変えたお話や、マンション建設をストップさせた話をお聞きしましたが、市長との関係ではどうなされたのですか。

#### 私の場合、そして柳川の広松さんの場合

私は、コンサルタントとして当初市に入りましたので、皆さんとは少し立場が違いますし、自治体によっても事情は違うでしょう。高架の問題や、マンションの問題など、私が先行し、後から市長に詳しく説明した形になりました。議員に怒鳴られても、市長に「あいつにまかせてあるから」と言われて助かりました。

私が一番感激するのは、柳川の水路の問題です。あそこの広松さんは、荒廃した水路を埋め立てて下水溝にする計画が、市長、県、建設省の全部で決まり補助金も付く段階で、新設された係の係長に任命されました（昭和52年）。彼は市長に直接談判に行って、「半



田村明先生

年待ってほしい」といって徹底的に検討し、半年後に、水路を蘇らせるという彼の意見を市長に納得させてしまったわけです。彼は、柳川の土地を良く知っていましたから、「水が無ければ土が死んでしまう」と説得したのです。あるシンポジウムで私が司会をし、広松さんが報告者のとき、「決まったことを全て覆すのですから、いろいろな障害があったでしょう」と聞きましたところ、「私は命をかけました」と言われました。これは迫力です。その後市長も2度代わりましたが、彼はそれでもいまだに断固としてちゃんとやっています。やったらできるんです。

#### 東京大都市圏の中で

東京圏全体は、関西圏のように大阪・神戸・京都と特色のある都市の連合ではなく、東京1点に集中しています。しかし、横浜のエネルギー計画などで、吸引力が弱まってきているのではないのでしょうか。

#### 横浜でのスタンス

関西は都市連合的で、京阪奈和を入れると大変魅力的です。私は西ドイツモデルのようなこうの方が望ましいと思っています。東京1点集中よりずっといい。よく横浜と神戸が比較されますが、神戸の大阪圏における位

置と横浜の東京圏における位置は全く違います。横浜にいくら300万人いようと、付録のようなものでした。私は東京から横浜に来たのですが、私がやりだした頃は話にならなかった。

それを何とかするための仕組みがイベントであり、いろいろな事だったのです。アーバンデザインもその一つです。東京には無いものをいかにやるかと言うことを一生懸命やってきました。たとえばイベントをやるにしても、東京と横浜にある圧倒的な差を意識してやる。そのところを意識しないで、「300万人になって、ある程度東京と対等かな」と思っていたら、面白いことは全然できません。横浜はだめだ、東京のはしっこにとまっているだけだ、だからこそエネルギーが出てくるんです。

東京の問題は、政策的には好ましいとは思っていません。首都圏整備計画で各都市に分散するように皆が言うようになりましたが、あれは私が首都圏整備委員会や国土庁と話し合って書かせたものです。ただ、書かないより良いけれど、書いたから実現できるということではありません。しかし、一応この方向は認められたわけで、そこまでの仕組みを作って事業をやっています。ほっておけば東京集中になってしまいます。だからそれと勝負するのが面白い。

もう一つ、大きな事業はこれから25年30年かかってやって、結果は50年100年ものなのです。くだらないことを焦ってする方が余計だめだと思います。長い目で見て本当にいい事をやっていけばいい訳で、少々ほかがレポートか何かやっていたっていいじゃないかということです。新幹線の新横浜駅前には何もありませんが、この状態を保つのに大変な努力をしています。時期が熟していないのに

変なことをしてしまっは大変です。

#### 学研都市での関係自治体の連携

学研都市の中心といわれる町は、実際には人口15,000人から45,000人の小さい町村なんです。田辺町、精華町、木津町の3町で行政連絡会を作っているいろいろやっていますが、その3町も郡が違ってこれまで付き合いが薄かったりで実情が十分にわかってはいません。関西の2大プロジェクトとして、小さい町ながら一生懸命やっている訳ですが、府や京都市、あるいは周辺市町との問題もあります。学研都市を成功させるためには、お互いがどうやって仲良くやっていけるのかについて提案的なところをお聞かせ下さい。より良い町にしたいので、接点が見出せる仕掛け作りができたらいいなと思っています。

#### 具体的な内容での協議会の運営を

協議会がいかにか具体的にやっているのが問題です。横浜でも、公害が横浜と川崎にまたがっていて、県と両市で協議会をつくり、ここでも大喧嘩をしました。しかし、一方

で仲良くやる仕組みも作り、結果的にはうまくいきました。具体的なことがあれば喧嘩し、そうするうちおのずと答えが出てくるものです。はっきり全部言いにくい場合は、民間の客観的に見れる人などを間に入れて自由に調整ができるようにするのは有意義だと思います。それと、絞っていかなければならない問題と拡げていかなければならない問題を分けて、看板も事務局も変えてやる必要があります。皆が集まって始めからいろいろなことを言っているようでは意見は一致しません。

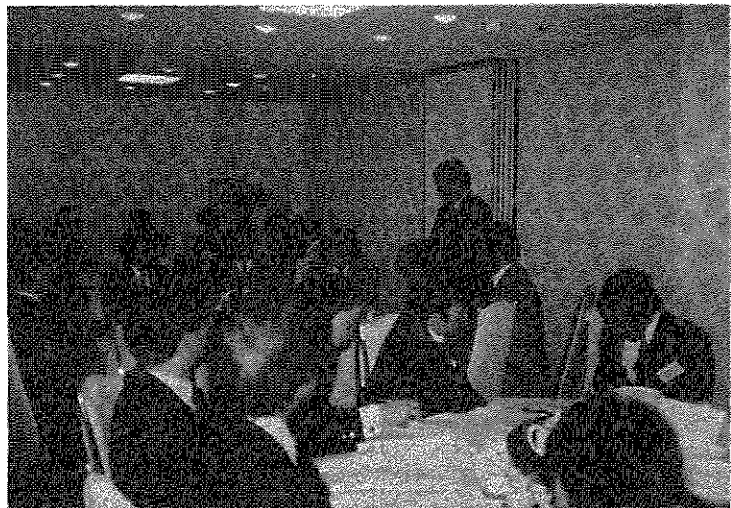
#### 新しいまちへの脱皮の工夫は

横浜でのまちづくりの様々な取り組みを聞いております。歴史や史跡名勝の保存や美しい都市景観の形成などの新しい横浜のまちづくりの御苦労があったかと思えます。

田舎のまちですが、これからいろんな事をしながら学研都市やまちづくりをしようとする時にあります、何かアドバイスをいただければ。

#### 岡山県真庭郡の「よなべ談義」の話

セミナー会場風景



昨日、蒜山高原のある岡山県の真庭郡に行ってきました。面積は840㎏、人口5万人ぐらいの郡です。「よなべ談義」と称して若い人と話しをしてきました。そういう所に行くのと凄く元気な人がいるんですね。人口2千人ぐらいの町に大きな企業が進出するというのですが、それに対してどうするか、進出はいけれど、高原を潰すのはとんでもない、と企業相手にすごい勢いです。

それほど小さいところでも、先程の柳川は4万人でして、そういう所はいくらでもある。かえって大きな自治体の方が元気がなくなってきています。大きな自治体は一人が同じ仕事をしていて、育てるのには便利ですが、「仕事をしている」という感じがつかめなようです。一方、小さな自治体は一人に与えられる仕事の内容が多くなり、仕事をしている感覚が自信にもつながっていくようです。こういう意味で皆さんはチャンスに恵まれていると思います。ただ、皆さんの場合は単なる自治体だけの問題でなく、連合体としての力をいかに発揮するかが課題ではないでしょうか。

#### まちづくりと女性の関わり

いままでのまちづくりはほとんど男性を中心に進められてきたと思います。これからは女性の意見が大切になると思います。横浜のまちづくりで、どのようにして女性の意見を取り入れたのかをお聞かせください。

生活に責任を負っている立場の人間として特に女性云々ということはしませんでした。男性、女性と区別すること自体が問題だと思っています。都市の問題、地域の問題、もっと小さな地区の問題の場合、生活者としての女性の方が多くなります。男性、女性という分け

方でなく、生活に責任を負っている立場の人がまちづくりに出てくると思います。その意味でたとえば居住地だったら女性の意見がなかったら通らないでしょうし、むしろそうならなければおかしいのではないのでしょうか。

#### 最後に

まちづくりや地域の問題は難しいですけれどもなかなか夢があり、先も長い問題です。すぐにはできませんが、皆さん楽しんでやっていただきたいと思います。楽しんでやる方がうまく解決するんです。難しいことも必要ですけれど、それと同時に大いに楽しんでやろうじゃないかという気持ちでお願いします。

\*\*\*\*\*

田村先生には、お忙しい中、ご講演いただき本当に有り難うございました。また、思ったよりも多数の方々のご参加と、熱心な討論で、盛り上がったものとなりました。あらためて厚く御礼申し上げます。

行政の第一線で活躍され、豊富な実践経験とそれに裏打ちされた先生の理論や、関西各自治体で最先端の課題に取り組んでおられる方々との議論は、「迫力」に充ちたもので、私たち民間プランナーにとっても非常に勉強になるお話ばかりでした。

紙面の都合で議論の内容を要約させていただきました。趣旨の違う点があるとすれば全て編集の責任ですのでご容赦ください。

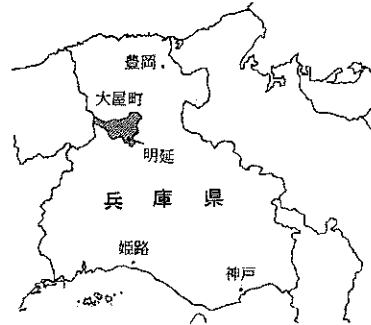
(まつもとあきら 京都事務所)

## イベントで閉山の街に活気づくり

— 兵庫県大屋町・明延鉱山 —

重本 幸彦

昭和62年3月1日、明延鉱山（兵庫県養父郡大屋町）が閉山した。1,000人近くあった人口は、既に3分の1にまで減った。多くの人々が去っていった後のこの4月12日（日）、山に残った人たちによる手づくりのイベントにぎやかに開催された。折から満開だった明延名物の桜のように、閉山の街に活気を保ち続ける願いを込めて――



### ■鉱脈を残しての円高閉山

明延は、古くからの錫・金・銀・銅・鉛などを産出する鉱山だった。約10年前にやはり閉山した近くの生野鉱山は鉱脈がつきての閉山だったが、明延は良質の鉱脈を残しての閉山だった。低成長下の昭和50年代にも、都会からのUターン青年が就職するなど活況を呈していた。しかし、最近の急激な円高の前には、さすがにダウンしてしまった。

「今尚、この明延の地中には、多くの鉱石の宝が眠っています。……日本で最後まで残ると言われたこの優良鉱山が、遂に閉山という形で千数百年の歴史に幕を閉じました。……地域ぐるみの必死の努力にもかかわらず、円高などという人為的な行為で押しつぶされたのです」。イベントの当日に配られた鉱山についての説明書の一節である。地元の誇りと無念さを感じられる。

### ■かつての明延には“文化の華”が咲いた

閉山後の地域振興の相談を受けて、町役場で話していた時、ある職員の人がポツリと言った――「大屋町は文化が高い」。兵庫県の

北部、但馬地方の山また山の過疎の町である。役場の活気ある雰囲気などから、この町には何かあると感じてはいたが、正直言ってやや意外な言葉だった。

昭和30年には、1,600人の従業員が働いていた（閉山直前は300人余）、家族を入れて明延の人口は数千人だっただろう。この地方では鉱山は収入の多い職場である。明延の街は活況を呈していた。当時、この明延では大阪とほぼ同時に封切り映画を見ることができ、一流の歌手や芸能人がショーを開くためにやってきた。東大出の技術者もたくさんいた。

「高校時代、10キロの山道を自転車に乗って、映画なんかを見に明延へ通った。帰りはいつも夜遅くなった」。役場の職員の青春の思い出話である。明延は“文化の華”開き地だった。

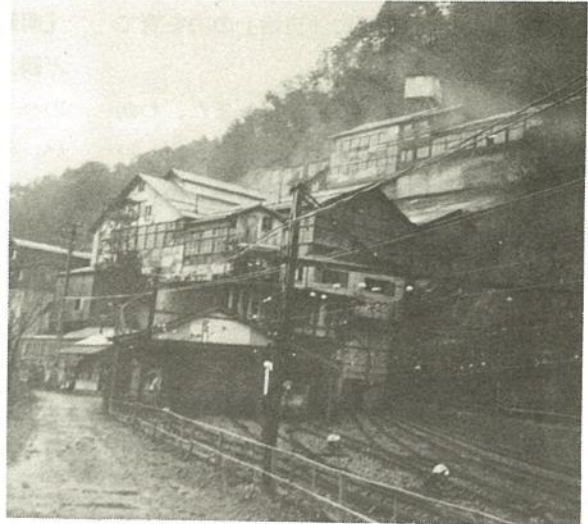
### ■まず、“活気づくり”から取りかかろう

明延をこれからどうするか。地元で産業おこしに取り組んでいるグループのひとつ「明延振興事業組合（代表＝田村新一郎氏、電器店のご主人）」のメンバーと話し合っていて街の“活気づくり”に取り組もうということ





**閉山記念テレホン・カード**  
 今回のイベントに際し、  
 地元が作成したもの。上が  
 いわゆる一円電車（人が乗  
 れる）、下が鉱石運搬電車。



**鉱山の事業所** ついこの間まで鉱石を産出。約6km  
 の鉄道で、隣の朝来町神子畑精錬所へ運ばれていた。  
 今は、残務整理が細々と続けられている。

になった。

この組合は、明延の特産だったスズの製品の製作などを始めようとしている。しかし、産業おこしには準備もいる。時間もかかる。そこで手始めにイベントからという訳で、この日の閉山記念と銘打った、一円電車（鉱山関係者用、乗車賃一円で有名）の撮影会と鉱山関係品の即売会になった。

あいにく寒い日だったが、新聞報道を見て、阪神方面など遠くから人々がやって来た。中



**イベントでの鉱山関係記念品の即売風景**  
 キャップ・ライト、一円電車のレール片、工具類、鉱石、一円電車のキップなどが、アツという間に売れた。

には、何十年ぶりかにはふるさと明延にもどってきた人もいたようだ。

事業組合のメンバーなど地元の人々は、手分けして、車の整理や、おにぎりづくりなどを作った。キャップ・ライト（ヘルメットに取付けるランプ）をはじめ、記念品もいち早く売れた。大成功だった。

でも、実は、私が内心驚き関心したのは、地元の人の手際の良さだった。初めてのイベントといいながら、わずか1ヶ月足らずの間にステキなテレホン・カードを作成、参加者も予約をとって百人程度に限定するなど、見事な運営だった。「文化が高い」—私はこの誇りある言葉を思い出していた。

明延地区は鉱山関係者だけの街である。「明延に農地はない」—役場の人はこう表現した。街は、電気・水道から共同浴場に至るまで、会社（明延鉱業㈱＝三菱系）によってまかなわれていた。地元の人々は、会社と組合（労組）にまかせておけば良かった。会社にも組合にも頼れなくなったこれから、行政の

応援を得ながらも明延に「自治」の力を育てることが鍵である。

明延はこれからどうなるか——まだ、わからない。でも、地元の人たちは、今、新しい地域おこしに向けて、着実に歩み出しつつある。この人たちなら困難を乗り越え、きっとやるのではないか、そう思っている。

(追記)

【明延への足】JR山陰本線八鹿駅からバスで1時間余。又は、車で中国自動車道山崎I.C. から北へ約1時間。

【明延の様子】現在のところ、鉱山の見学など観光地としての整備はできていない。木造のハモニカ長屋など典型的な鉱山のたたずまい。平日なら残務整理中の鉱山事務所近くまで行けるだろう。清流があり、散策・川遊びは可。旅館1軒、食堂・喫茶店なし、パン屋あり。

【問い合わせ】詳しくは、大屋町役場(TEL 0796-69-0120)まで。

【その他】地域おこしのアイデア募集中。5月23・24日にNHK労組によるイベントあり。

(しげもとさちひこ 大阪事務所副所長)

## 旧刊新刊書評

### 「山より大きい猪」

上前淳一郎著 講談社刊

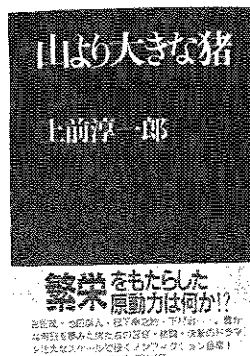
糸 乗 貞 喜

絶えて久しく見かけなかった言葉だが、先日の日経新聞で「絶対的窮乏化法則などというものをとなえていて……」という批判的言い方ではあるが、珍しい文句を見つけて感慨ひとしおのものがあった。

思い出してみると、いわゆるアンボの頃の経済学上の議論などは、日本の経済力という山より大きい高度成長による、豊かな社会へという猪の出現によって、吹っとんでしまったように思う。

この本は「高度成長に挑んだ男たち」という副題がついているように、アンボ後の所得倍増の舞台に浮かんだ人々の軌跡を示している。それは吉田茂であり、池田勇人であり、松下幸之助、田中角栄、田村敏雄、下村治などをめぐるノンフィクションの世界である。

この本の見どころは、下村、田村をめぐる



高度成長理論の形成を、それが池田を通して国の政策となり適用され、波はあったものの高度成長をして現実のものとなっていく過程である。その中で下村が、ケインズの学習を通して、経済は設備投資と技術革新によって「成長するものだ」と考えるに至り、田村を中心とする研究会ができて、経済成長の考え方が多くの人々に受け入れられていくあたりが、この本のヤマである。

しかし、この部分を知りたい人は、自分で読んでいただくしかない。したがってこの小文では読まない人の為の「ちょっといいエビ

ソード」を紹介しておく。

昭和22年に入ると、次の次官は池田だ、という噂が省内に流れるようになった。それを聞きつけて、主税局長室に乗り込んできた男がいる。給与局第三課長の大平正芳であった。

大平とは、昭和19年池田が東京財務局長だったころ、部下の間税部長として知り合った仲だ。お互い赤切符だし、酒も好きで、意気投合していた。

「池田さん、今度あなたは次官になるそうですね」

「-----」

「悪いことはいいません。それだけはおやめなさい」

池田は大平を見返した。目があるのか、ないのかわからないような大平の顔からは、真面目なのか、冗談をいいにきたのか、見当もつかない。

「何故かね？」

「あなたは、なるほど税のことはよく知っている。数字にも明るい。しかし、書類は読むが、書物を読んだことがないでしょう」

「書物？」

「本ですよ。本はおろか、雑誌の『東洋経済』ひとつ読まない人です、あなたは」

「-----」

「そういう人物が次官になったら、明治の太政官以来、最悪の大蔵次官になる。だから、やめて下さい」

大蔵省は戦前から、後輩が先輩に率直に意見具申をしていっこうにおとがめがない役所である。それにしても、この意見には池田も度肝を抜かれた。こうまでげげげいってくる男とは思ってもいなかった。

相変わらず無表情な大平と向き合ってい

るうちに、思わず池田は吹き出した。なるほど、この男のいう通りかも知れん、という気にさせられてきたから不思議である。

「大平、きみのいう通りだな。おれは次官には向かない人間だ」

「そうですよ。主税局長で辞めれば、立派な局長だった、とあとあとまでみながいてくれます」

「しかしね、じつは、おれは選挙に出るつもりなのだ」

池田は正直に打ち明けた。

「衆議院ですか？」

「そうだ。そのためには、次官と局長では相場がぜんぜん違う。だから次官になりたいのだ」

「なるほど-----」

「したがって、長くやるつもりはない。肩書さえつけばいいのだから、まず三カ月で辞める。だから見逃してくれよ」

「そうですか。そういうことなら、わかりました」

大平は、入ってきたときと同じように無表情に、出ていった。

私の紹介したかったちょっといい話というのは「書類は読むが書物は読まない」という文句である。大平という人はあんな顔をしていてなかなかの名文句をしゃべる人だと思った。この名文句が この本を読まない人の為のサービスで、何かの折に使ってみたい。いただきたい。

ここまで書いてきて、この田村、下村コンビについて書かれたもう一冊の本を思い出した。沢木耕太郎の絶版になっている本であるが、それは次号に紹介する。

(いとりのさだよし)

まちかど

ちょっと気になる城下町  
— 北国街道 長浜の巻 —

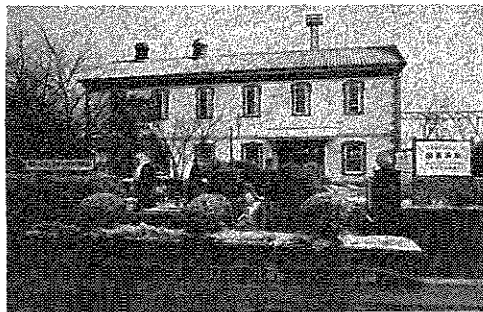
小 阪 昌 裕

琵琶湖の北東の湖畔にロマンティックなまち、長浜があります。まちのシンボルは豊臣秀吉で有名な長浜城です。月夜に湖上から眺めるそのシルエットは格別だそうです。

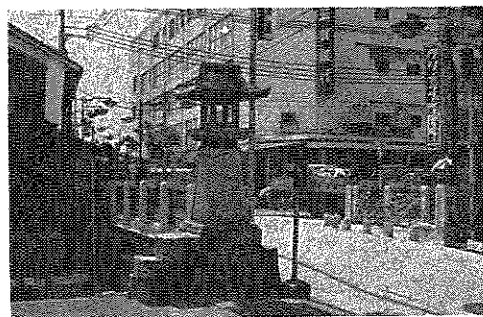
また、明治時代には、鉄道と湖上路との結節点でもありました。もともと東海道本線は大垣方面から長浜に至り、大津までは蒸気船の湖上の旅だったのです。駅舎は今も長浜駅のかたわらに「旧長浜駅舎鉄道資料館」として残っており、西洋風れんが造りの洒落た建築物は、昨今のレトロブームに乗って、バッヂやステッカーにもなっています。

また、長浜はエンジンを発明したディーゼルがとりもつ縁で、西ドイツのロマンティックシュトラッセ（街道）にあるアウグスブルグと姉妹都市です。そして長浜にも日本のロマンティックシュトラッセともいえる、中山道から分岐した“北国街道”がまちを南北に通り両側には歴史的町並みが残っています。

これらの歴史文化の香りをさらに高めようと、様々な工夫が始められています。たとえば石燈籠を残し、小橋を揚げ石畳にし、花をあしらったポケットパークにし、まちかどに



旧長浜駅舎鉄道資料館  
(現存するJR最古の駅舎)



石畳の小橋（右手がポケットパーク）

は「街具」（ストリートファニチュア）も作ろうとしています。

このように小さなものでも何かを作るとにまちの持つ特徴を現代にまた将来に伝えていく取組みがされ、その過程でまちのイメージがより鮮明になっていくのだと思います。

この次に訪れる時は、どんな仕掛けがされているか、楽しみの持てるまちです。

(こさかまさひろ 大阪事務所)

**ARPA・K (株)地域計画・建築研究所**

ARCHITECTS, REGIONAL PLANNERS & ASSOCIATES, KYOTO

本 都 事 務 所	☎600	京都市下京区四條通り高倉西入ル立売西町82 (大和銀行京都ビル8階)	TEL (075)221-5132(代)
大 阪 事 務 所	☎540	大阪市東区石町1丁目1番地 (天満橋千代田ビル2号館)	TEL (06)942-5732(代)
名 古 屋 事 務 所	☎460	名古屋市中区丸の内3丁目18番30号 (ツボウチビル6階)	TEL (052)962-1224
九 州 地 域 計 画 研 究 所	☎810	福岡市博多区中洲中島町3-3 児島ビル3階	TEL (092)281-2349
北 海 道 地 域 計 画 建 築 研 究 所	☎047	小樽市色内1丁目2番19号 通信浜ビル3階	TEL (0134)29-1109